

「死の恐怖」について

——とくに「死への準備教育」との関わりから

三谷 尚澄

——あなたたちの恐怖が、私自身の恐怖をさらに掻き立てます。どうして恐れる
のですか？ 死の床にあるのは私なのに！¹

はじめに

人間は死ぬ、かならず死ぬ。誰でも死ぬ。泣こうが、わめこうが、大金をつもうが、いずれやってくる<そのとき>を逃れることはだれにもできない。グラス片手に浮かれ気分のそのときも、下宿にこもって一人で読書しているその瞬間も、それどころか、暖かい布団のなかで安らかな眠りについているそのあいだでさえ、<命が終わるとき>は刻一刻、私たちの背後に忍び寄っている。私の知るかぎり、この運命を首尾よく逃れえた人間は歴史上一人として記録されていないし、また、これからも、そのような奇跡を実現する並外れた個体が姿を現すことはなさそうである。

また、これは私の個人的実感をでるものではないが、大多数の人間にとって<死>とはとても恐ろしく、不気味で、逆らっても無駄な<なにものか>である。そして、逆らっても無駄であると知っているからこそ——捕食者を前にした駝鳥のように——われわれはその<恐ろしいもの>から目をそらし、直面せざるをえなくなるその瞬間まで死を直視することを避けとおそうとするのだろう。この点を鋭く洞察しつつ、ブレイズ・パスカルは次のように語っている。

人間は、死と不幸と無知とを癒すことができなかったので、幸福になるためにそれらのことについて考えないことにした。

われわれは、自分がやがてかならず死ぬことを知っている。われわれの人生において、われわれがそれ以上確実に知っていることなどなにもない、といってもよいほどである。しかし、それにもかかわらず、われわれは死とは何であるかを知らない。そして、われわれは、死とは何であるかについて考え、公然と語るものたちを日常の生活空間から締め出し、排除しようとする。死を語るものたちは、不気味で不吉な招かれざる客として忌み嫌われ、われわれの目の届かぬ遠い世界へと追放される運命にある。

ミノタウロスの皿

漫画家、藤子・F・不二雄の短編に、つぎのようなストーリーのものがある。未来の地球人が宇宙船事故で遭難し、地球と環境のよく似たとある惑星に漂着する。その星には、地球に比べれば文明の程度はずっと低いものの、地球の人類そっくりな外見をした生物が暮らしており、主人公の青年は、あるときミノアという名の少女と知り合う。ミノアは、その星で一年に一回行われる、「ミノタウロスの大祭」における「名誉ある主役」に選ばれるほどの、美しく、気立てのよい少女であった。

さて、地球からの救助船が到着するまでの時間を、主人公はミノアと楽しく過ごすことになるのだが、あるとき奇妙なことに気がつく。この星には、人間にそっくりの姿をした生物だけでなく、牛頭人身の、知能も高く言葉を話す奇妙な生物が暮らしていたのである。彼らの話を聞くとところによれば、ウシの頭をした地球という「ズン類」と呼ばれる生物こそがこの星を支配するものたちであった。そして、「ウス族」と呼ばれる人間のかたちをした生物たちは、ウシの姿をしたズン類たちに奉仕することにその存在価値を見出される被支配者階層なのであった。ウス

には「愛玩用」、「奴隷労働用」、「食肉用」の種類があり、そして美しく、上等の「食用」として「飼育」されてきたウス族の一人であるミノアはためらいなくこういつてのけるのである。私たちは、「おおぜいの人の舌をたのしませるのよ。・・・競争がはげしいの。生まれたときからその日のために努力するの。すこしでも



藤子・F・不二雄、『ミノタウロスの皿』より

おいしくなるように。あたし、自信があるわ。発育が悪いとそりゃみじめなものよ。並肉でだめならハムかソーセージ。もっと悪けりゃ畠の肥料……」

呆然とする主人公をよそに、大祭の日が刻一刻と近づいてくる。ミノタウロスの大祭とは、もちろん、一年に一人、選びぬかれた食用種のウスをズン類のいけにえにささげる儀式のことである。主人公は、ミノアの命を救おうと必死の努力を試みる——「地球へ逃げよう、そうすれば君の命は助かる」しかし、そう必死の説得を試みる主人公に対して、死

の恐怖という問題にまともに取り合おうとしないミノアはこう返答するのである。

いや！！ 大祭の名誉をうしなう方がもっともってこわいわ。

ミノタウロスの大祭当日、決意を固めた主人公は、地球の文明が生んだ強力な光線銃を携えて祭場へ向かう。力づくでもミノアをズン類から奪い去り、地球に連れ帰ろうとしたのである。しかし、必死の救出を試みる主人公に対するミノアの返答は次のようなものであった。

——とびおりろ！ あとはひきうける。

「え？ なに？ きこえないわ」

「お皿のちかくにすわってね。うんと食べなきゃいやよ」

——助けてといってくれえ！！

「そうでしょ、おいしそうでしょ」・・・

呆然とする主人公をひとり残し、ミノアは間近に迫った死に対する恐怖心をみじんもみせず、にこやかに手をふり、大歓声に応えながら「大祭」の会場へと姿を消す。そして、ここに「ミノタウロスの大祭」はそのクライマックスを迎えるにいたるのである・・・。

サトゥルヌスとミノア

この短編が、読者の心に「異様な作品」という印象を与えることは間違いないであろう。少なくとも、私自身は、物語が終盤をむかえ、「ミノタウロスの大祭」が最高潮へといたる過程を読み進めるうちに、背筋に冷たいものを感じざるをえなかった。しかし、藤子・F・不二雄の描くこの「異色」な世界に漂う「薄気味悪さ」は、いったい何に由来するものなのだろうか。

上に引用したカットをみていただければわかるとおり、「ミノタウロスの皿」という作品は、『ドラえもん』や『おぼけのQ太郎』を思わせる、いわゆる藤子不二雄調のほのぼのとした明るいタッチで描かれている。これを、たとえば、同じく「人間が食料となる」場面を描いたフランシスコ・ゴヤの「わが子を食べるサトゥルヌス」などと比べてみると、藤子作品の「異色ぶり」は明瞭に理解されることになるであろう。前者が、その暗さ、怖さ、残虐さを最大のメッセージとして前面に押し出すのに対し、後者は「人が食べられるなんてあたりまえ、人が死ぬなんて日常の些事」といった、人の死をめぐるわれわれの実感と

はあまりにもかけ離れた情景を読者の眼前に突きつけるものだからである。

これをいい換えるなら、われわれが藤子のこの作品に感じる「薄気味悪さ」の正体とは、「死」をめぐるミノアの態度が「人間の死」をめぐるわれわれの直観的理解とあまりにもあまりにも大きなズレを示している、という点に求められることになるだろう。死とは恐ろしいものであって、極力ふれること



フランシス・ゴヤ、「わが子を食べるサトルヌス」

が避けられるべきテーマであり、語られるにしても暗い色調の、深刻な言語で語られるのでなければおかしい。明るい語調で死が語られるなどということがあってはならない。この点が、死を恐怖のタッチで描いたゴヤの作品はわれわれの理解の範疇のなかに入るのだが、藤子の描く少女ミノアの物語は、われわれの理解の範囲を越えた、そしてその分だけ薄気味の悪い作品である、という印象を与えることの原因なのであろう。ウシがヒトを食べる、という支配／被支配関係の逆転が藤子作品の不気味さを醸成しているのではない。今から食べられようとするヒトが、まさにその瞬間にも、命の絶対的終焉をまったく恐れることなく無邪気に死へと向かう、というテーマの異様さが、われわれの背筋をぞっとさせるものの正体なのである。地球で食料にされるウシだって、屠殺されようとするまさにその瞬間には恐怖を感じるだろうし、助けてくれと悲鳴をあげるはずであろう。

死を迎えたとき、人は

しかし、自分自身の死がすぐそばにまで近づいている、と自覚したとき、通常の間人とはどのような反応を示すものなのだろうか。踏み込むことのためられるこの問題に取り組み、人がみずからの死を自覚したそのときから実際に死を迎えるまでのあいだ、どのような心理的プロセスを経るものであるかについての詳細なドキュメントを残したのが、スイス生まれの精神科医、エリザベス・キューブラー＝ロスである。

キューブラー＝ロスは、その著作『死ぬ瞬間』の中で、患者が不治の病を悟ったときから実際に死に至るまでの過程を「否認」、「怒り」、「取引」、「抑うつ」、「受容」の五段階に整理して説明している。以下、キューブラー＝ロスによる「死に到る五段階」の説明を、簡潔に紹介しておくことにしよう。

1. まず、みずからの生の終わりが近づいた、と初めて気づいたそのとき、ほとんどの患者は自己の死に対する第一の反応として「いや、私のことじゃない。そんなことがあるはずがない」という「死の否認」の儀式を行うのだという。——「だれか他の人の検査結果に間違えて私の名前が記入されてしまったのだ。」「よりによって妻が死ぬなんて。子どもが生まれたばかりなんだ。そんなばかなことがあるか!」・・・²。

2. 「否認」に続く第二の段階は「怒り」である。これ以上否定しても無駄だと悟ったとき、患者は、神をののしり、家族をののしり、健康な人すべてをののしる。ある信心深い歯科医師の反応は、この「怒り」の段階における人びとの態度を典型的に示している。どうしてこの私なのか。あそこを歩いている知り合いの老人をみる。もう82歳で、どう考えても世の中の役に立っているとは思えない。リウマチ持ちで脚が悪くて汚らしい。どうして私ではなく、あのジョーンズじいさんではいけないのか・・・³。

3. 「怒り・激情」の段階を超えると、患者たちは次に「取引」の段階に至る。「今週はずっといい子にして、毎晩お皿を洗うから、お泊りにいかせてくれる?」 そうたずねる子どものように、死を目前にした患者はみずからの「善行」と引き換えに、なんらかの「延命」が得られることを望むのだという。息子の結婚式まで生き延びられるなら何でもします、わがままをいわないいい患者になりますからせめてそれまでは、と。

4. 患者は、次に「抑うつ」の段階を迎える。乳ガンの治療にともなう女性らしさの喪失、入院と治療が長引くことに伴う貯蓄や生涯のキャリアの喪失、これまで手にしてきたすべてのものを失わなければならない、というやり場のない喪失感が、患者のこころを抑うつ状態に落ち込ませる。また、死期がいよいよ近づいた患者には、この世との永遠の別れに対する心の準備をしなければならない、という「準備的な抑うつ」が存在することも忘れられてはならない。

5. 以上の諸段階を順調に通過すると、患者たちはやがて自分の「運命」に落ち込んだり怒りを感じたりすることをしなくなる。疲れきり、衰弱がひどくなった患者は、ある程度の期待をもって最期の時が近づくのを見守るようになるのである。周りに対する関心は失われ、世間の出来事や面会者には煩わされたくないと願うようになる。痛みが消え苦闘が終わり、闘おうとする感情さえも欠落したおだやかで瞑想的なあきらめのとき。やすらかな予期がおとずれ、あたかも「長い旅路の前の最後の休息」が与えられたかのように、死を目前にした患者たちは「受容」の段階を経験するのであるという。

キューブラー＝ロスによれば、以上が死を目前にした患者がたどるといふ五段階の心理プロセスである。ベストセラー、ロングセラーとしての売れ行きが示すとおり、「死を間近

に控えた患者の心理状態」についておそらくは世界で初の科学的分析を示したこの著作は、1969年の出版とともに一大センセーションを巻き起こした。彼女の著作はきわめて大きな社会的反響を呼んだ。「死のタブー化」をこえて医療の現場で「ターミナル・ケア」が熱心に論じられ、近代的医療設備を備えたホスピス病棟が世界規模で普及するようになった歴史的事実の背景には、キューブラー＝ロスによる『死ぬ瞬間』の存在が不可欠であった、と評する論者すら存在するほどである。

死のタブー化

しかし、キューブラー＝ロス自身がその自伝的著作において語っているように、前例のない彼女の「新しい研究」に対する周囲の反応はおよそ好意的とはいえないものであった。四人の神学生たちとともに、二百件以上に及ぶインタビューの第一回目が始まろうとした1965年当時の状況について、キューブラー＝ロスは次のように語っている。

・・・死に瀕した患者で、神学生と話をしてよいという人をもとめて自分の病棟を巡回した。何人かの医師に危篤の患者がいないかどうかをたずねたが、嫌悪の反応しか返ってこなかった。末期患者の大半をかかえる病棟の医長は、私に患者と話をする許可さえ与えてくれなかった。それどころか、「きみは患者を食い物にしている」と叱責された。自分の患者が臨終にあることを認めようとすらない医師たちにたいして、私の申し出はラジカルにすぎるようだった・・・⁴。

キューブラー＝ロスの研究に対するこの拒絶反応は、患者の延命と回復こそが使命であり、死とは失敗であり敗北に他ならない、と規定する医師たちに特有の現象ではない。過去を振り返るとき、一般に、人類はつねに死を忌まわしく憎むべき出来事として地下深くに封じ込めようとしてきたのであるし、また、医学の輝かしい進歩を通じて、苦痛なしの人生、ペインフリーの人生が当然のものとみなされるようになった現代にあって、唯一苦痛を伴う機会である死がことさら忌避の対象にされようとする傾向は、その勢いを増しつつあるとさえいってよい⁵。

たしかに、われわれの身辺を見渡すとき、死に関する情報はあふれるほどに存在している。宗教や正義をめぐる戦争で、テロリズムで、自然災害で、あちこちで人が死んでいる。テレビやインターネットをのぞいたその瞬間から、これでもかとばかり「死」をめぐる情報の氾濫が私たちの身に襲いかかる。しかし、その一方、日常生活のなかに根をおろした、みずからの皮膚感覚に訴えかけるリアルな死、一人称の問題として語られるべき「死その

ものとの接触」という事態をみれば、これは死を異質なものとして排除する「澄み切った現代社会」の中から姿を消しつつある経験の一つである、ということも可能なのではないだろうか。

「死」は、病院の、最先端の近代的設備の向こうへと、そして、それとともに日常の空間の外部へと追いやられてしまっている。ダニエル・キャラハンがかつて「老いの近代化」ということばで語ったように、自分の家で生まれ、自分の家で死を迎える、という人間の生と死をめぐる極めて一般的なあり方は、医学の進展とともにそのかたちを急速に変化させ、人びとは最期のときを病院の一室で、最新の医療器具を取り付けられたままで迎えることが常態化してしまっている。「老いとともに訪れる死のとき」という発想が、いわば非日常化してしまっているのである。死は、依然として悲しい出来事であり続けてはいるものの、われわれの日常の外にある、別世界の出来事であるとしかいいなくなってしまう——。

このような「死のタブー化」と呼ばれる現象は、かならずしも目新しい事態ではない。日常生活における「婉曲語法」(「死ぬ」というかわりに「永眠する」「身罷る」「他界する」)の存在や「忌み言葉」(「四」は「死」を、「九」は「苦」を連想させるために嫌うなど)の使用は、人々がいかに慎重に死の話題を避けようとしているかを例示する事象だということができるだろう⁶。また、後年、キューブラー＝ロスがエイズ患者のためのホスピス「ヒーリング・ウォーターズ・ファーム」を建設したときに、「『エイズ好きのばあさん』がつぎのバスで町からでていくことを望んでいた⁷」地元の住民たちがキューブラー＝ロスの自宅に火を放った、というエピソードも、エイズという病に対する当時の人びとの無理解だけでなく、「あからさまに死を語る伝道者」に対する無意識的反感や拒絶反応が「よきクリスチャン」たちのこのころの中にも潜んでいることを明かしたてる出来事であった、ということができるだろう。「エイズばあさんを追っ払ってやった」という「モンタレーの酒場の男」の告白は、死の恐怖を身近に突きつけるものに対する反感、嫌悪の発露にほかならないのである。

「死のタブー化」と「死への恐怖」の積極的意義

しかし、もちろん、人間は死への恐怖にとらえられてばかりいるわけではない。何らかのかたちで死への恐怖を分析・検討し、無用の心理的負担を取り除くことで、死への過剰な恐怖をノーマルなレベルにまで緩和することが必要な作業であることは、誰しも納得のいくところであろう。入学や就職など、人生の節目にあたる試験を受ける前には、だれでもそのための特別な勉強や訓練を必要とするごとく、人生最大の試練である死に対しても

特別な準備が必要とされるはずだ、というのはきわめて見やすい道理であるように思われる⁸。

そして、このような事情を受けて、日本でもアルフォンス・デーケンをその代表的先駆としつつ、「生の究極の到達点である死の日まで、生と死を深く見つめて生きる原点」としての「死への準備教育⁹」が市民権を獲得しつつある。そして、「死への準備教育」のありうべきカリキュラムとして実験的に提示されるさまざまな項目の中でも、「死への過剰な恐怖をノーマルなレベルにまで緩和すること、あるいは、「死への恐怖を正しく認識し、自身の極端な恐怖に打ち克つこと」は、「死への準備教育の大切な目標の一つである」ことがデーケンによって指摘されている¹⁰。

また、デーケンによれば、「死への準備教育」には、極端な恐怖のノーマルなレベルへの緩和、という目標に加えてさらに大きな効果が期待されることにもなる。すなわち、死への恐怖をたんに「緩和し、乗り越える」だけでなく、われわれが自らのもつポテンシャルを最大限に発揮し、前向きに、そして積極的に人生の諸問題と取り組むためには死の問題と幼いころから真剣に取り組んでおく必要がある、という主張までもがデーケンの構想する「死への準備教育」のプログラムには含まれることになる。死への恐怖感、われわれの人生において積極的な役割を果たしうるものでもあるのではないか、というこの提案に関して、デーケンは次のように述べる。

・・・死への恐怖と不安には、二面的な性格がある。ただ受動的にこうした感情に身を委ねてしまえば、絶望と無気力に陥り、精神をむしばまれる危険性が高いが、逆に、これを人生の挑戦として受け止め、能動的に伝えていくなれば、人間的に成長する機会とすることもできよう。

とかく死への恐怖や不安というと、ただ否定的な感情と考えてしまうことが多いが、生命の危険を回避させる機能や、創造性をはぐくむといった積極的な役割もある。恐怖には危険を知らせるシグナルのような機能がある。たとえば、病気やけがをしたときに何の痛みも感じなかったら、私たちは医師の手当てを受けたり、薬をつけたりしないかもしれない。苦痛そのものは不愉快だが、それによって健康上の危機を乗り越えるのに役立っている面はたしかにある。死への恐怖にも同様の役割が認められる。

また、死への恐怖は、それまで気づかなかった潜在的能力を呼び起こす刺激となる。私たちに、自分の死後にも存在し得る永続性をそなえた何かを創り上げて、後世に遺したいという願望がある。しかし、多くの人が生命の有限性に気づいていながら、自分のなかの未開発の可能性をそのまま放置しているようだ。死への恐怖が人生の有

限性への自覚を目覚めさせ、こうした創造性を発揮させる強力なインスピレーションとして働くこともある¹¹。

このように、デーケンによれば、自らの死を自覚することは、死に到るまでの自らの生のあり方を真剣に受け止めるという態度とまっすぐにつながっている。すなわち、デーケンの理解によれば、「死の学」としての「サナトロジー」とはすなわち「生の学」に他ならない。そして、そこから、サナトロジーとは「死生学」をさす概念として理解されるべきである、というデーケンの情熱的な提案がなされるに到るのである。

私たちは、死を見つめることによって、自分に与えられた時間が限られているという現実を再認識することができる。それは、毎日をどう生きて行ったらよいかと改めて考え始めることを意味するのだから、「死への準備教育（デス・エデュケーション）」はそのまま「生への準備教育（ライフ・エデュケーション）」にほかならない。デーケンによれば、これこそが、「死生学」の実践段階として「死への準備教育」が不可避免的に要請されることの中核的理由なのである¹²。

「タブーを越えること」と「残されるタブー」

日本における「死生学」の普及史を考えると、そこにはデーケンの熱意と誠意あふれる努力が存在していたという事実を否定することはだれにもできないであろう¹³。彼の強力なイニシアティブなしに、当時支配的であった「死のタブー化」の風潮を越えて、教育の現場において「死の問題」が公式に語られ、今日ほどの定着ぶりをみることができたかどうかは疑問であるし、また、現在「死への準備教育」として語られるプログラムの内容をみても、彼の地道な努力と提案を通じて生み出された骨組みがその根底に潜んでいることは誰の目にも明らかなのである。

事実、デーケンは、「死の恐怖」の問題だけでなく、死への準備教育をわが国に定着させるための建設的な提言をきわめてプラクティカルなレベルにまで踏み込みつつ行っている。親を亡くした幼児に死をどう説明するか、また、その子を葬儀に参加させてよいものかどうか、感受性豊かな小学生に対して、「死」をテーマとした授業をどのように導入すればよいのか、思春期の青少年に、自殺を思いとどまらせるための具体的方策にはどのようなものがあるか、大学における「死」をテーマにした授業としてはどのような内容のものが考えられるか、配偶者をなくした熟年の男女に対する悲嘆教育のあり方はどのようなものがありうるか、末期患者への病名の告知は行われるべきか否か、など、「人間が死ぬとはいかなることであり、そして、われわれはやがてやってくるそのためのにどれだけの準備

をしておけばよいのか」という問題について、デーケン詳細にわたる具体例とプログラムを準備し、「死への準備教育」が公の水準で実行へと移されるに十分な材料をわれわれに提供してくれているのである。

しかし、日本における死への準備教育が、デーケンの強力なイニシアティブのもとに進められてきた、という事実は、そのいくら肯定的に評価してもしきれない側面と同時に、日本における「死生学」の基本的枠組みが彼の敬虔なカトリック信仰というバイアスの上に成立している、ということをも意味せざるをえない。とりわけ、「死の恐怖の克服」という課題が「死生学」の中心に位置づけられるべき課題であることを率直に認めるその一方で、「死への恐怖を克服するための究極的な鍵」とは「死後の永遠の生命への希望」を抱くことに他ならない、とまでデーケンが断言するそのとき、死の準備教育について考える人間が感じざるをえないある種のギャップなり違和感といったものが姿を現すのである。

デーケンはこういう。「たとえばキリスト者にとって、死とは単なる終わりではなく、天国での永遠の幸福に到る扉」なのであり、「死のかなたに勇氣と希望をもたらす至福の生命の存在を確信する人にとっては、死へのプロセスにおける苦悩の数々もいづれか耐えやすい」ものとなる、と。これは、多くの臨死患者と最後の数時間を過ごしてきた彼の経験からも間違いのないところであって、この考えが「歴史を通じて人類の大多数が、死を消滅ではなく、新たな生命への移行とみなしてきたという事実を呈示して患者の参考に供することは差し支えない」ことであろう、というデーケン死生学の基調低音を構成しているのである¹⁴。

また、以上のような考え方は、ターミナル・ケアの現場における死に瀕した患者に直面する際の問題としてだけでなく、「死への準備教育」一般に通じる妥当性をもった考え方である、ともデーケンはいう。ウィリアム・ジェイムズ、カント、ガブリエル・マルセルなど、死後の生命を説明する哲学的議論が過去に数多く存在したことに言及しつつ、デーケンは次のように主張するのである。死後の生命の存在を厳密に証明することは、少なくとも現時点では不可能であるが、しかし、このことは同時に、「死後の生命が存在する可能性がある」という認識をも支持する議論となっているのであって、このことを無視して死後の生命を闇雲に否定してしまうのはかえって非理性的な態度であろう。むしろ、死後の生命をめぐるさまざまな議論の蓋然性は「死後の生命が存在する」という一点に向けて収斂していくことになる、すなわち、「死後の生命が存在する蓋然性は大きい」と結論づけるほうが、死後の生命をめぐる問題に関しては正しい態度だということになるのではないかと¹⁵。

たしかに、デーケンのいうとおり、「死後の生命」をめぐる宗教的背景のないところで、

「死への準備教育」を遂行することにはきわめて大きな困難が伴うであろう。たとえば、事故や残酷な事件でともだちをなくした小さな子どもに向かって、「○○ちゃんは死んでしまったのだからもうこの世には何も残っていないんだよ。死ぬというのはなんにもかもなくなってしまうことなんだよ」と冷徹に告げることは私にはできないことのように思われる。あるいは、余命いくばくもないガン患者にむかって、「残念ながらあなたがいまさらすぎることでできるものはなんにもありません。あなたには、ただ覚悟を決めるよりほかになにも残されてはいないのです」と突き放したような言葉を投げかけることは、少なくとも私にはためらわれることであるとしがたいようがない。そして、死に瀕した幾百もの患者たちと正面から向き合ってきたキューブラー＝ロスその人が、その後半生においては「死後の生」や「霊的存在」を確信し、「臨死体験」についての言説を矢継ぎばやに公表するに到っていることもまた、デーケンのいう「死後の生をめぐる蓋然性の収斂」を支える論拠として位置づけられる事実であるかもしれない。

タブーと向き合うということ

死への準備教育をめぐる言説の困難さは、ときに、語りにくいことを語らざるをえない、タブーに踏み込まざるをえない、という意味で、「性教育」を語ることの困難さにたとえられることがある。また、それと同じ意味で、死をめぐる問題を語ることには「精神障害」をめぐる問題を語ることと同型の難しさが伴ってはいないだろうか、と私はときに考えることがある。精神障害者という不可測で得体のしれない人間たちを、自分たちの暮らす正常で澄み切った世界から排除し、隔離し、治療すべき対象として指定する、という図式には、「死」の話題を疫病のごとく嫌い、不吉な問題を光の届かない地の底深くに封じこめて語らせようとしぬ人びとの態度とどこか通底するものが潜んでいるのではないかと私には思われるのである。

このようなことを考えるとき、北海道の南端、襟裳岬からさほど遠くない、浦河と呼ばれる小さな町にある精神障害者たちの共同住居の話が私には思い起こされる。以下、多少なりともアナロジカルな語りかたにならざるをえないが、「べてるの家」と呼ばれる不思議な空間に暮らす人びとの物語を紹介することによって、「死への準備教育」にまつわる私のなんともいいがたい違和感のようなものの説明に代えたいと思う。

精神医療に携わる立場の人間にとって、一般に、病気の再発・再入院はできるだけ避けられるべき事態であろう。それゆえ、病気が再発しないように、医師たちは患者の服薬スケジュールを厳重に管理し、きちんと外来に通わせ、ストレスのない生活を指導すること

で、一日もはやく患者を「社会復帰」させることに第一の目標をおく。しかし、「べてるの家」と名付けられたその小さな施設に暮らす人びとは、すこしでも健常者に近づいて自立すること、幻想や妄想を取り去って社会復帰すること、立派な人間になって一人前に働くことなど、精神障害者たちに課せられた固定観念の十字架を取り去ってしまう。「そのままでもいい」、それがべてるの人びとが発し続けているメッセージなのである¹⁶。

「偏見差別大歓迎集会——決して糾弾致しません」。べてるの人びとが全国各地に出張し、旅先で繰り広げる「講演会」はこのようなスローガンとともに始まったという。「弱さをきずなに」した「だれも排除しない生きかた」。そして、べてるの人びとが発する「そのままでもいい」というメッセージには、たしかに、常識では理解することのできない、奇跡的なまでに美しく感動的なエピソードを生み出す力が備わっている。たとえば、一人の乱暴な若者がいて、「金がなくて靴下が買えない」といっては住人を殴り、パチンコで負けたといっただけで大暴れしてパトカー騒ぎになる。もう我慢がならない、出て行ってもらおうとみんなの意見がまとまりかけたまさにその瞬間、どこからともなく「いや彼も困っているんだ。彼も追いつめられているんだ、つらいんだ」という声があがる。そして、「いま彼に必要なのは応援なんだ」という「ミーティング」の結論に基づいて、乱暴ものの若者に虎の子の五千円を手渡すという儀式が催されることになるのである。

被害者が加害者に援助の手を差し伸べる、という出来事。「なぜそうなるんだ？」というのが通常の感覚だろう。そして、その意味で、「誰も排除しないがっかりあいと出会い」の日常から生じる奇跡的な何かがべてるにはある、というのはたしかに間違いのないところである。しかし、ここで、それらの物語を、人間のやさしさ、美しさを賛美する、感動の物語とだけ捉えて話を終わらせることはできない、という点にわれわれは注意する必要がある。なにしろ、さきほどの乱暴な若者のエピソードに話を戻すなら、「さらにすごいのは、そうやってお金を渡しても問題は解決されなかった」ということなのである。その乱暴者の若者は、その後もべてるの家の住人たちを毎日殴りつづけていたのである・・・¹⁷。

当事者たちの生々しい発言が示すとおり、べてるの家とは理想郷でもおだやかな笑いが一日を支配する平和で安らぎに満ちた暮らしの空間でもない。べてるの家に暮らす人びとは、初期のメンバーが始めた昆布の商売が軌道にのり、その年商が一億円を越えたいまも、精神分裂病という病気と泥沼の闘いを続けているのであり、彼らの物語を「精神障害者の、精神障害者による、精神障害者のための自立」をめぐるサクセス・ストーリーとしてのみ受け取ることは許されないだろう。べてるの家を取材し、『悩む力』と題されたすぐれたドキュメンタリーをつづった斉藤道雄はこうのべている。「べてるはすべての人をしあわせにするしくみではなかった。それどころか、やってきた人びとに自らが直面する問題の意味

を問い、考え、悩み苦労して生きることを求めるところだった。そこにきても病気をかかえながら生きる苦労はなにひとつ変わらない」と。べてるの入居者の一人、早坂潔さんはこう語っている¹⁸。

だから、べてるってのはね、いろんな意味でみんながいい、いいっていいけどね、やっぱり住んでみないとね、よさっていうかね、こわさとかよさとか、いろんな面が出てくるからね。ただべてるがいいっていいきてね、住みますっていいでも、住めないところだわ。ビール瓶は吹っ飛んでくるし、出刃包丁は吹っ飛んでくるしさ。・・・ケンカはあるしね。(みんな)病気だからな¹⁹。

べてるでの暮らしの大部分は、「騒ぎと争いと、病気と発作と混乱と、あとをたたないめごとに満たされた日々」だったのであり、そしてそれはいまに到ってもまったく変わらない現実である。べてるの家はいつも問題だらけの場所だったし、そしておそらくはこれからも、問題だらけの毎日をべてるの家の人びとは生き続けていくのである²⁰。

問題・悩み・生きづらさ／それらをめぐる覚悟、あるいは諦念について

べてるにかかわる人びとの最大の特徴は、あまり真剣に病気を治そうとしないところにあるのだという。処方された薬を飲まなくなり、病気が再発しようが再入院しようが、それは当然おきるべくして起こったことであり、予想されたことですらあるのだから、それは当人にとって「順調」なことであり、苦労を重ねた人間は「顔つきがよくなってきた」と積極的に評価さえされるのだという。そして、そんなふうの問題を掘り下げ掘り下げ、苦労や悩みを正面から見つめる「浦河のやり方」を、ソーシャル・ワーカーの向谷地生良さんは「土をおこす農業みたいなこと」だと評している²¹。

「浦河のやり方」の根底には、精神分裂症という治りづらい病をきっかけとして得られた、世の中には「どんなに努力しても、あがいても解決できない苦労や悩みが備えられている」という人間存在への深い認識が潜んでいる。そこには、「生きづらい自分」を正面からみつめざるをえない毎日の暮らしから生み出される、「生きることに悩みあえぐ」という力」が根づいている。「生きる苦労とか生きるたいへんさをすべてとりさって、軽くなって楽に生きたい²²」という潔癖願望から遠く離れたところで、「悩む力」をもったひとりの人間として暮らすことの真実といったものが息づいている。こんなふうに進めるとき、私は、べてるの入居者、岡本勝さんがつづった一文——「今の俺」と題されたそれ——をどうしても思い出さずにはいられない。岡本さんはこう書いている。

いつも人生のことを考えている。岡本勝、生きていて良かったか悪かったか。金は無い。家は無い。女にはもてない。無い無いづくしで寂しくなり、この世がいやになり、泣けてくる。

この文章を紹介する齊藤道雄の説明によれば、岡本さんは、いつまでも病気を抱えて生きていかざるをえない自分の人生に絶望して、一度は「家族にすまないから俺、海に入る」といって港に向かおうとしたことがあるのだという。そして、そんな思いを抱えながら生きる続ける岡本さんは、毎日、

・・・泣きながら浦河の町を歩いている。笑っているときや歌っているときもあるが、ほとんどは「人生のことを考え」ながらべてるの家と大通りの三田村商店とのあいだを行ったりきたりしている。あるとき向谷地さんが、泣きはらした目をしている岡本さんに心配して声をかけると「岡本勝がかわいそうで・・・」とつぶやいたという。向谷地さんはそんな岡本さんには「誰よりも真剣に、壮絶なまでに自分の人生と向き合おうとする思い」があるのだという²³・・・。

そして、そのような「壮絶なまでに自分の人生と向き合おうとする思い」について、岡本さんはべてるの作業所で昆布をつめながら行われたインタビューの中で次のように語っている。

——岡本さんも、ときどき働くんですか

「そんなに働かない」

——たまに、来るのかな

「うん」

〔・・・中略・・・〕

——どういうときに

「あっち（共同住居）にいても、つまんないだけだし」

短いやりとりのあいだは、それぞれたっぷりと間があいている。

空白をはさみながら岡本さんはゆっくり手を動かし、ときどき口を開く。

——毎日どうですか、岡本さん

「だめですね。なんだか、空虚だ」

——空虚だけど、やっぱりなんかしなきゃいけないから

「そうだね」

——これから、どうしますか

「わかんない。考えてもわかんない。こうやって生きてく」・・・²⁴

これからどうしますか。——「わかんない。考えてもわかんないけど、こうやって生きていく」。精神分裂病を抱えた岡本さんの語るこのメッセージには、自分の人生や死の問題と正面から向き合うとき、われわれの誰しものが襟を正して聞き取るべき大切な何かがこめられてはいないだろうか。死の問題とべてるの問題を重ねあわせて考えるとき、私はどうしてもそのような思いを禁じることができない。死とは——そして、死という十字架を背負ったわれわれの生もまた——徹頭徹尾無意味で空虚で残酷なものである、と愚直に叫び続けることにもなにかの意義が伴うのではないか、という古風な考えが私の脳裏をよぎらずにはいないのである。

ただし、同時に、最後に一言こう付け加えておく必要があることを忘れてはならない、とも私は思う。斉藤道雄によれば、彼が会ったべてるの人びとのやさしさは、そのすべてが「切なさをたたえたやさしさ」であったという。そして、いまなお問題だらけの毎日を過ごす浦河の人びとのその切ないやさしさにふれるもののころには、ときおり、不思議なやすらぎや平安の感情がめばえることがあったのだという。波風と騒動ばかりの毎日の中、ふとおとずれるという「人生の小春日和」のような瞬間の存在は、「死」をめぐるわれわれの態度に何らの影響力も持ち得ないささいなエピソードにすぎないものだろうか。

註

¹ キューブラー＝ロス(2001b, p. 80)より。

² キューブラー＝ロス(2001a, p. 30; 2003, pp. 283-286)。

³ キューブラー＝ロス(2001a, pp.88-)。

⁴ キューブラー＝ロス(2003, p. 238)。

⁵ キューブラー＝ロス(2003, p. 241)。

⁶ デーケン(1986a, p. 15)。

⁷ キューブラー＝ロス (2003, p. 474-475)。

⁸ デーケン(1996, p. 20)。

⁹ デーケン自身は、氏の編集による「＜叢書＞死への準備教育(デス・エデュケーション)」(全三巻)が出版された1986年を、死のタブー化の強かった当時の日本が「死への準備教育」へと向かうことになった「ターニング・ポイント」として位置づけている。CF. デーケン(2001, p. 5)。

¹⁰ (デーケン 1986a, p. 14)。アメリカでのアンケート調査でも、この結果は裏づけられている。(デーケン 1986b, p. 207)。

- ¹¹ デーケン(2001, P. 17-18).
- ¹² デーケン(1996, p. 22).
- ¹³ たとえば、大谷(2005, p. 94)が、日本における「死の教育」、「いのちの教育」における「開拓者デーケン」の影響力の大きさに言及している。
- ¹⁴ デーケン(1986b, 209).
- ¹⁵ デーケン(1986a, pp.46-47).
- ¹⁶ 斉藤(2002, p. 48, 54).
- ¹⁷ 斉藤(2002, p. 75).
- ¹⁸ 斉藤(2002, p. 225).
- ¹⁹ 斉藤(2002, p. 15) . 入居者、早坂潔さんのことば。
- ²⁰ 斉藤(2002, p. 18).
- ²¹ 斉藤(2002, p. 142).
- ²² 斉藤(2002, p. 140-141).
- ²³ 斉藤(2002, p. 98).
- ²⁴ 斉藤(2002, p. 144).

文献

デーケン, アルフォンス〔編集〕 (1986a), 『死を教える』, メジカルフレンド社 .
 デーケン, アルフォンス〔編集〕 (1986b), 『死を考える』, メジカルフレンド社 .
 デーケン, アルフォンス (1996), 『死とどう向き合うか』, NHK 出版 .
 デーケン, アルフォンス (2001), 『生と死の教育』, 岩波書店 .
 藤子・F・不二雄 (1995), 『異色短編集 1・ミノタウロスの皿』, 小学館文庫 .
 キューブラー＝ロス, エリザベス (2001a), 『死ぬ瞬間——死とその過程について』, 鈴木晶訳, 中公文庫 .
 キューブラー＝ロス, エリザベス (2001b), 『死、それは成長の最終段階——続 死ぬ瞬間』, 鈴木晶訳, 中公文庫 .
 キューブラー＝ロス, エリザベス (2001c), 『「死ぬ瞬間」と死後の生』, 鈴木晶訳, 中公文庫 .
 キューブラー＝ロス, エリザベス (2003), 『人生は廻る輪のように』, 上野圭一訳, 角川文庫 .
 大谷いづみ (2005), 『「いのちの教育」に隠されてしまうこと——『尊厳死』言説をめぐって』, 松原・小泉編, 『生命の臨界——争点としての生命』, 人文書院所収 .
 斉藤道雄 (2002), 『悩む力——べてるの家の人びと』, みすず書房 .

〔文学研究科 COE 研究員〕